

第77歩

「手話ダンス甲子園」

「手話ダンス」、それはまさにアートでした。そして、障がいのある人もない人も、明るい笑顔で踊る姿はアーティスト集団のように思えました。

高松市は平成31年に「手話言語及び障害のある人のコミュニケーション手段に関する条例」を制定し、手話への理解と普及を通じた温かなまちづくりを進めています。そんな中、市内大型ショッピングセンターの臨時会場において、「手話ダンス甲子園 四国大会」が開催されました。会場に一步足を踏み入れると、開会前から言葉の壁や障がいの有無を軽々と超えていく、熱いエネルギーが広がっていました。ステージに立ったのは、障がいのある人もない人も一緒になって結成された十のチームです。そして、手話を取り入れたダンスパフォーマンスが始まると、その場にいた誰もが瞬く間に引き込まれてきました。何より胸を打たれたのは、「手話」と「ダンス」、そして豊かな「表情」が織りなす圧倒的なクリエイティビティ（創造性）です。手話が、全身の躍動や優しい視線、弾ける笑顔と組み合わせることで、言葉以上に雄弁で確かなメッセージへと昇華されます。一つひとつに思いがこもった創造的な動きには、心底感心させられました。と同時に、胸が熱くなるほどの感動を覚えました。

会場を見渡すと、ステージと客席の境目すら消え去ったかのような一体感に包まれていました。障がいのある人もない人も、大人も子どもも、抱っこされた赤ちゃんまでもが、手話のパフォーマンスが創り出す世界観を一緒に楽しみ、心を通わせ合っていたのです。誰一人取り残さず、あらゆる人が同じ空間で喜びを分かち合うこと。まさにこれこそが「インクルーシブ」（包摂的）なイベントの本質であると実感しました。手話とダンスという表現のかたちが、多様な人々を結びつける架け橋となっています。今大会の会場で目にしたみんなの笑顔と温かな空気感は、手話言語条例が目指す「誰もが互いを尊重し、自分らしく暮らせる街」の理想的な姿に通じます。この感動の輪が、高松の街全体へ広く伝わっていくことを楽しみにしています。

